

郷土博物館・文学館だより



現在、当館では来年の1月11日（月・祝）まで企画展「いにしへの渋谷 ～ 遺物から探る歴史の一頁～」を開催しています。



鶯谷遺跡から出土した弥生土器

企画展

「いにしへの渋谷

～ 遺物から探る歴史の一頁 ～」開催中

今回の企画展は、近年渋谷で発掘調査が行われた遺跡を中心に、これまで出土した遺物を展示しながら、渋谷に住んでいた原始・古代の人々の生活を紹介しています。

展示している遺物は、縄文・弥生時代の竪穴住居跡が合計で100軒を超した鶯谷遺跡をはじめ、代々木八幡遺跡や豊沢貝塚などから出土した土器や石器です。さらに豊沢貝塚から出土した縄文人の人骨のほか、貝塚に捨てられた動物や魚の骨など、当時の人たちの暮らしぶりを知ることができる貴重な資料が展示されています。



11月3日に実施された展示解説風景

東横線の開通と並木橋駅

平成 20 年（2008）6 月 14 日に、東京メトロ副都心線の渋谷・池袋間が開通しました。しかし、渋谷駅周辺、および駅より南の明治通り沿いでは、まだ工事が続いています。これは、24 年、副都心線と接続予定の、東横線地下化工事が続いているからです。

大正 15 年（1926）2 月 14 日、現在の東京急行電鉄の前身である東京横浜電鉄は、神奈川（のち廃駅）・丸子玉川（現在の多摩川）間に鉄道を開通させました。ついで、その年のうちに丸子玉川・渋谷間の建設に着手し、昭和 2 年（1927）8 月 28 日に同区間が完成します。このときに、両区間をあわせて東横線と名付けられました。

中目黒を出て渋谷に向かう路線は、渋谷町に入るところで、鎗ヶ崎の台地にぶつかるため、隧道（トンネル）が造られました。当時、複線を通すことのできる隧道は、関東の私鉄では例がなかったといえます。隧道を出て代官山を通り過ぎた路線は、すぐに山手線にぶつかります。そこをまたいでから国鉄渋谷駅に接続させるため、長さ 1,803m にも及ぶ高架橋が渋谷駅まで造られました。これも、当時としては最先端の技術が駆使され、短期間で造られたといえます。渋谷駅の部分 150m ほどは、盛り土をして建設されました。

開通当時、この代官山・渋谷間の高架橋の途中に、並木橋という駅がありました。今ではその面影はほとんどありませんが、かつては渋谷川にかかる並木橋のすぐ北に、駅舎と長さ 55 m ほどのホームがありました。渋谷駅からわず

かな距離の駅でしたが、並木橋駅の東方には青山学院・実践女学校・農業大学（現在は世田谷区に移転）・国学院大学が並んでおり、当時は多くの学生でにぎわっていたようです。

多くの利用客があった並木橋駅も、戦時下の昭和 20 年、渋谷に大きな被害をもたらした 5 月 24・25 日の空襲により、焼失しました。そして、6 月 1 日に営業停止、翌年 5 月 31 日に廃止となりました。

並木橋駅の被災や、戦後の渋谷の復興を見続けてきた、鉄道建設当初からの高架橋も、東横線の地下化工事が完成し、渋谷と中目黒の区間が地下にはいると、およそ 80 年の長い役目を終えることとなります。



旧並木橋駅ホームから渋谷駅方面をのぞむ

寺山修司と天井棧敷館

平成 20 年（2008）は、詩人・歌人・劇作家・演出家など、多彩な活躍で知られた寺山修司（1935-1983）の没後 25 年でした。これを契機に、数々の寺山関係の出版物が書店の店頭並び、寺山が作詞したカルメン・マキのヒット曲『時には母のない子のように』を知らない若い世代にも、寺山作品が再評価されているようです。

寺山は、青森の高校在学中から、詩や俳句、短歌に才能を発揮し、上京後は昭和 33 年（1958）『空には本』で前衛詩人としての地位を得て、谷川俊太郎、大江健三郎、浅利慶太といった文化人たちと交流します。

渋谷区との関わりは、昭和 42 年に宇田川町の「松風荘」を仕事場にしたことに始まります。ここに、横尾忠則、東由多加、九條英子らと演劇実験室「天井棧敷」を立ち上げ、昭和 44 年 3 月には、渋谷区渋谷 3-11-7、並木橋近くに天井棧敷館および地下小劇場を設立し、第 1 回公演「時代はサーカスの象にのって」を上演します。寺山は、小劇場演劇（アングラ劇場）において、一種破壊的で見世物的な世界を展開しながら前衛芸術運動を推進し、伝統的新劇界に対抗しようとしていました。

こうした小劇場演劇の活動は、60 年安保から続く全共闘運動に呼応したものでした。寺山の「天井棧敷」のほか、唐十郎の「状況劇場」、金杉忠雄の「劇団中村座」、鈴木忠志、別役実の「早稲田小劇場」、佐藤信の「劇団自由劇場」をはじめ

め、太田省吾、清水邦夫、蜷川幸雄ら演劇人が続々と台頭します。

昭和 44 年 12 月 13 日付の『朝日新聞』では、状況劇場と天井棧敷が乱闘の結果、寺山と唐が逮捕された事件を報じています。事件の発端は、状況劇場が 12 月 5 日から 1 ヶ月の予定で、渋谷区の金王八幡神社そばの敷地を借り切って、テント興行を始めるにあたり、寺山が初日に葬儀用の花を贈ったことにあったといえます。こうした事件が新聞紙上をにぎわせたのは、当時小劇場演劇がそれだけ注目をあびていた証でしょう。残念ながら、渋谷の天井棧敷館は昭和 51 年に閉館し、新たな天井棧敷館は元麻布に開館します。

かつて渋谷に天井棧敷館があったことは、人々の記憶の中から次第に消え去ろうとしています。しかし、寺山が詩歌に込めた「身捨つるほどの祖国はありや」「さよならだけが人生だ」というメッセージは、混沌とした今を生きる若者の心にも強く響いているようです。



かつて天井棧敷館があった場所

収蔵資料紹介

焼塩壺 (やきしおつぼ)

口径	7.0 cm
底径	5.8 cm
器高	9.3 cm



「塩」は健康面からも、そして調味料としても欠かせないものです。現在では化学的に生産することもできますが、それまでは、日本では主に海水から塩を作っていました。ミネラルをたくさん含んだ自然塩は、自然食ブームの中で見直され、いまではたくさんさんの種類が店頭にならび、手軽に各地の塩を味わうことができます。

写真の資料は、江戸時代、山城国淀藩稲葉家の下屋敷があった北青山遺跡から出土したものです。コップのような形をしています。江戸時代に生産されていますが、焼塩壺といえます。本来はふたがついていました。どのように使用していたかといいますが、焼成してできあがった壺(土師器質の土器)の中に、臼で細かくした粗塩を詰めてふたをし、壺ごとそのまま焼いて精製してしま

した。そのため、こうしてできた塩を、壺焼塩と呼んでいたようです。この塩は高価なもので、武家の宴会の席などで用いられ、贈答にも使われていました。焼塩壺の形は、多くはコップに似た形をしています。器高の低い、小さな鉢形をしたものもあります。

また焼塩壺の側面やふたの上面には、刻印されているものがあります。この刻印は、主に塩の生産者を記したもので、それを調べることにより、どこで作られたものがわかります。江戸時代、瀬戸内海を中心に入浜式の塩田が盛んに営まれ、各地で塩が生産されました。塩の一部はこの壺に入れられ、消費地へ出荷されました。この資料には「泉州麻生」と刻印されていますので、現在の大阪府貝塚市あたりから、江戸まで運ばれてきたようです。

【今後の展示予定】

企画展 「いにしへの渋谷」

～遺物から探る歴史の一頁～

開催中 平成 22 年 1 月 11 日 (月) まで

* 渋谷区内から出土した遺物を展示。

特別展 「渋谷の富士講」

一富士への祈り 一

平成 22 年 1 月 23 日 (土) ～3 月 22 日 (月)

* 富士講の講社・山吉講の資料を中心に、渋谷にゆかりのある講社の資料を紹介します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00(入館は 16:30 まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 18歳以上の団体料金

※ 60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.12

平成 21 年 1 2 月 1 日 発行